OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポザウネンコアにおける共属感情の経験 : 参与型パフォーマンスとしてのブラスバンド
Author(s)	秋山, 良都
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2017, 51, p. 31-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71403
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ポザウネンコアにおける共属感情の経験

――参与型パフォーマンスとしてのブラスバンド――

秋山　良都

キーワード：ブラスバンド／参与型パフォーマンス／音楽＝社会的相互行為／紐帯形成

序

ポザウネンコア（Posaunenchor）は、ドイツの福音主義教会に見られるブラスバンド活動である。2016年、ポザウネンコアは「ドイツの福音主義教会のトレードマーク」という描写とともにドイツのユネスコ無形文化遺産に認定された。[1)] 本論文[2)] は、筆者が2014年よりゲッティンゲンを中心に行っているポザウネンコアの民族音楽学的フィールドワークのうち、2014-15年に行った、参与観察とインタビューを中心とした集約的調査に基づく考察である。

ポザウネンコアを含むブラスバンドは、19世紀以降の文化－社会的背景を条件として出現し展開された音楽実践形態であり、世界各地の近現代音楽文化において重要な役割を担ってきた。しかし、この音楽実践形態の音楽学における研究と議論が進展したのは近年になってからである。既に1970年代にはブラスバンドの研究自体は行われていたとはいえ、20世紀の音楽学の枠組み、つまり西洋芸術音楽を扱う狭義の音楽学と「非西洋」を扱う民族音楽学では、ブラスバンドは周縁的対象として扱われるにすぎず、また、音楽産業に媒介された音楽現象を扱うポピュラー音楽研究でも盲点となっていた。しかし、80年代以降の音楽学各領域の再編と学際的音楽研究の進展の中、世界各地に様々な形態で存在するブラスバンドが、音楽文化の近代化、近代西洋音楽の世界的拡散、アイデンティティ表象、共同体形成、アマチュア的

音楽実践などに関する音楽文化研究の議論上重要な研究対象として浮上してきた（細川 2001; Brucher and Reily 2013）。現在では、フィネガン（Finnegan 2007［1989］）、ハーバート（Herbert 2000）などイギリスの市民的ブラスバンドの研究、フレース（Flaes 2000）の旧植民地ブラスバンドの研究をはじめとして、世界各地の個別事例の研究が蓄積されてきている中、最近年では、レイリーとブルチャー（Reily and Brucher 2013）の論文集が、近代西洋ブラスバンド（軍楽隊）の世界的拡散と土着化、社会的・文化的空間の形成、共同体的音楽実践を主題として、19世紀以降のヨーロッパ、東アジア、アフリカ、南北アメリカの事例の研究を通文化的な視点で提示している。しかし、同種のブラスバンドに対し、ポザウネンコアの音楽学的議論は、国際的にもドイツ語圏においても、未だ初期段階である。

ポザウネンコアの研究はしかし、福音主義教会との関係から、90年代以降、ドイツにおいて、神学および福音主義教会史の領域で進展してきた。ポザウネンコアに関する最初の体系的学術研究は、シュナーベルの、楽器、演奏曲、実践、神学的意味についての歴史的考察（Schnabel 1993）と、J. クーローをはじめとした主要指導者の伝記及び思想研究（Schnabel 1994）である。シュナーベルはさらに、ヴェストファーレンのポザウネンコアについて教会史的観点からの詳細な歴史研究を行っている（Schnabel 2003）。歴史研究には他に、自身もポザウネンコアの指導者であったランゲによる、ハノーファー州教会下のポザウネンコアの実践、組織、演奏曲についての研究がある（Lange 1999）。これらの教会史的歴史研究に加え、最新の研究には、神学者のコールによる、ポザウネンコアの現在の音楽実践に焦点を当てた神学・社会学的研究がある。コールは、2012年に、地理的におよそニーダーザクセン州に相当するハノーファー州教会及びおよそメクレンブルク＝フォアポンメルン州、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州、ハンブルク市に相当する北ドイツ教会のポザウネンコアにおいて、アンケートに基づく大規模な社会調査を行なった（Koll 2013）。コールはこの調査に基づき、ポザウネンコアの集団的器楽合奏の教会音楽実践としての宗教性と、現在の福音主義教会の状況における

ポザウネンコアの実践の意義を実践神学の観点から論じている（Koll 2016）。また、ポザウネンコアの指導者であった、シュレムが編集した『福音主義ポザウネンコア活動史論集（Beiträge zur Geschichte evangelischer Posaunenarbeit）第1-5巻』（Schlemm, 1989-2001）は、学術的な論集ではなく、ポザウネンコアの関係者や内部者の関心に基づいて編集されたものだが、個別の指導者、協会、ポザウネンコアについての具体的な記述を含んでおり、ポザウネンコア研究の重要資料である。他に、協会・連盟や個別のポザウネンコアの歴史を記述した編年史や記念刊行物等も数多く編集されているが、ここでの詳述は割愛する。

本研究は、こうしたポザウネンコアの神学・教会史における研究成果を踏まえながらも、ポザウネンコアを、ブラスバンドに関する音楽文化研究の対象として位置づける。すなわち、19世紀以降の近代的（あるいはポスト近代的）音楽文化において、ポザウネンコアが、いかなる音楽活動として、いかにして実践されてきたか、そして、音楽実践によって、どのような社会的・文化的イデオロギーを包含した空間を形成してきたかを明らかにすることを研究全体の射程としている。本論文は、2010年代現在のポザウネンコアの活動の目的、価値観、実践形態、音楽的的経験とその機能を考察の対象とする。ポザウネンコアの参与者は、ポザウネンコアの活動において、参与者が〈ゲマインシャフト（Gemeinschaft）〉[3)]と表現する強い親密性と紐帯、ポザウネンコアに一体となって所属しているという共属感情（Gemeinschaftsgefühl）を経験する。本論文では、ポザウネンコアの音楽実践を通じて、参与者、つまりポザウネンコアの団員が、この共属感情をいかにして経験しているかについて、民族誌的記述を試みる。まず、ポザウネンコアの歴史的背景と現在の活動を概観し、その上でより参与者の視点に基づいた民族誌的描写を提示する。そして、T. トゥリノの「参与型パフォーマンス」の概念を援用し、ポザウネンコアにおける音楽＝社会的相互行為としての「参与型パフォーマンス」での共属感情の経験による親密な紐帯の形成過程を考察する。

1. ポザウネンコアの歴史的背景・演奏曲・楽器

1.1. ポザウネンコアの起源と展開

「ポザウネンコア（Posaunenchor）」の概念は、18世紀後半、オーバーラウジッツのヘルンフート兄弟団（モラヴィア教会）で最初に用いられた。兄弟団では、信仰生活として音楽が重視され、生活のあらゆる場面で賛美歌が歌われ、器楽合奏が実践された。兄弟団の1764年の記録に見られる器楽合奏ポザウネンコア（Posaunenchor）の記述がこの概念の初出とされている（Bosch 1989, 45）。

しかし、現在のドイツにおけるポザウネンコアは、プロテスタンティズムの信仰覚醒運動（Erweckungsbewegung）から興った、プロイセン領東ヴェストファーレンのミンデン・ラーヴェンスベルクにおけるキリスト教青年協会のポザウネンコア運動と、ハノーファー王国リューネブルガーハイデのヘルマンスブルク宣教団の影響で設立されたポザウネ協会（Posaunenverein）を直接的起源としている。1848年革命後からドイツ帝国創設期の間に、両地域を超えてポザウネンコアが設立され、1880年代にはドイツ帝国内で約160団体約2,000人が活動する規模に至った。更に、第二帝政期、ヴァイマール期を通じてポザウネンコアの設立が相次ぎ、1920年代には約1,400団体約16,000人、1930年代末には約4,000団体約40,000人が活動する規模にまで拡大する。第二次大戦後も設立は相次ぎ、1970年までに東西ドイツ合わせて約5000団体約75,000人、現在では約7,000団体約120,000人が活動するに至っている（Schnabel 2013, 296-307）。また、信仰覚醒運動の宣教団の活動によって、ナミビア、南アフリカなどアフリカ各地をはじめとした宣教地にもポザウネンコアが設立された。

ポザウネンコアの実践形態と組織的な運営を基礎づけた指導者のうち、特に影響力をもったのは、「ポザウネの総長（Posaunengeneral）」と呼ばれた、ミンデン・ラーヴェンスベルクのJ. クーロー（Johannes Kuhlo 1856-1941）で

ある。クーローは、詩篇150「ポザウネで主を讃えよ（Lobet den Herrn mit Posaunen）」をモットーとして掲げ、ポザウネンコアを「神の栄光のために（zur Ehre Gottes）、会衆の教化と同胞のキリスト教的喜びのために（zur Erbauung der Gemeinde und chtistlichen Freude seiner Mitglieder）」（Kuhlo 1909, 2）を根本理念とした宗教的金管演奏とするべく、生涯をかけて指導にあたった。

J. クーローは現在、ポザウネンコアの「創設者」として認知されている。ただし、彼は、第二帝政期には、反セム主義思想を含むナショナリズム的政治活動へ関与し、最晩年には、ヒトラーに心酔して国家社会主義ドイツ労働者党に入党した人物でもあった。クーロー以外にもナチズムに協力的なポザウネンコアの指導者は少なくなかった。この問題については本論文の範囲を超えるが、ポザウネンコアにおけるプロテスタンティズムとナショナリズムの関連について、今後の研究での精査が必要である。

1.2. 演奏曲・記譜・楽器編成

ポザウネンコアの演奏は、器楽でありながら歌唱と密接に関係づけられている。これは、歌唱によってこそ福音伝道が達成されると主張したクーロー父子の仕事、すなわち父E. クーロー（Eduard Kuhlo, 1822-1891）によって編纂された最初の演奏曲集（歌集）『ポザウネンブーフ（Posaunenbuch）』（1881年）と、これを引き継いだ子J.クーローの曲集編纂および指導に負っている。

現在のポザウネンコアの演奏曲を概観すると以下のようになる。A. 歌に関する楽曲：（1）歌（賛美歌、キリスト教会歌、宗教歌、民謡）（2）コラール編曲（コラール前奏曲、コラール幻想曲等）（3）合唱とポザウネンコアのコラール・カンタータ（4）小ポザウネンコア、オルガン、バンドとの協奏的コラール（5）モテット、カンタータ、合唱曲の編曲、およびB. 器楽曲：（1）古典的器楽曲の編曲（イントラーダ、舞曲、塔のソナタ等のバロック器楽曲）（2）ポザウネンコアのための作品（3）大衆的通俗曲の編曲（Schlemm 1996; Eismann 2013）。ポザウネンターク（Posaunentag）や教会大会（Kirchentag）などの祝祭を機会として演奏曲が刷新され、ポザウネンヴェルク（Posaunenwerk）

（＝州教会規模のポザウネンコアの連盟）やキリスト教青年会（CVJM）によって演奏曲集が編集されている。特にB（2）、（3）は2000年以降、新譜の出版が相次ぎ、ポザウネンコアで演奏される機会が増加している。ポザウネンコアの楽譜データベース「ポザウネンコア楽譜データバンク（Posaunenchor Notendatenbank）」には、現在約45,000曲（同楽曲の別の曲集への再録等による重複を含む）が登録されている。現行の『福音主義歌集（Evangelisches Gesangbuch）』（以下EG、付随する番号は収録番号）に対応した『ポザウネ-コラール集（Posaunen-Choralbuch）』がレパートリーの基軸だが、ポザウネンコアでは、演奏の機会に応じて、この豊富な選択肢の中から選曲する。

ポザウネンコアは、ソプラノ・アルト・テナー・バスの四声体を基本とし、個別のパート譜ではなく、全員が同じピアノ譜表四声体スコアを用いて合奏する（場合によって声部が分割されることもある）。この記譜と演奏の慣習は、J. クーローによって、ポザウネンコアの世俗的管楽合奏からの差異化、教会の四声体合唱やオルガンとの互換可能性、演奏者全員の楽曲構造全体の可視性、移調が不要で編成の規模にも柔軟な対応が可能であるという利便性を目的として導入された（Kuhlo 1909, 62-72）。

現在のポザウネンコアでは、市販されている金管楽器が用いられ、演奏されている楽器自体には特殊性はない。現在では概ね慣習的に、ソプラノはトランペット、アルトはトランペット、フリューゲルホルン、フレンチホルン、テナーはトロンボーン、フレンチホルン、テナーホルン、バリトン、バスはトロンボーン、バリトン、テューバで演奏される。近年ではトランペットとトロンボーンが編成の大部分を占めているが、使用楽器の拘束があるわけではなく、金管楽器であれば音域に応じた声部に参与することが可能である。

2. ポザウネンコアの音楽実践

2.1. ポザウネンコアの一年

以下では、フィールドワークに基づいて、ハノーファー福音ルター派州教

会ポザウネンヴェルク（Posaunenwerk der Evangelisch-Lutherischen Landeskirche Hannovers）に属するゲッティンゲンのポザウネンコアを事例として、ポザウネンコアの音楽実践を民族誌的に描写する。信仰覚醒運動での農民・手工業層青年の活動に始まったポザウネンコアは戦後、福音主義教会教区の活動として定着し、主に教区の地域住民を構成員として、教会を活動の場とし、教区住民との地域的社会関係の中で演奏活動を行ってきた。

ポザウネンコアの公式の演奏活動は、礼拝での演奏、宣教・ディアコニー的演奏（病院や介護施設での慰問演奏など）、ポザウネンタークや教会大会等祝祭での演奏、教区や地元の町村のイベントでの演奏、教会での演奏会である。一年間の活動は教会暦によって構造化されている。最繁忙期である12月の待降節・降誕節の礼拝、クレンデ（Kurrende）＝街頭演奏、クリスマス・マーケットでの演奏に始まって、復活祭礼拝、キリスト昇天祭、聖霊降臨祭の礼拝、夏季の屋外礼拝、11月11日の聖マルティン祭の行列の伴奏[4]などを経て、およそ11月末の永遠の主日（Ewigkeitssonntag）の墓地での演奏と礼拝をもってポザウネンコアの一年がめぐり、再び待降節を迎える。また、教区住民や教会関係者、ポザウネンコアの団員の誕生日を祝う演奏、結婚式、葬儀などでの演奏も行う。

2.2. 礼拝と演奏会

礼拝での演奏は、ポザウネンコアの活動のうち最も重要なものとされている。ただし、毎週の主日礼拝で演奏するわけではない。ポザウネンコアが演奏するのは、降誕祭、復活祭、キリスト昇天祭、聖霊降臨祭、といった教会暦上重要な主日の祝祭礼拝、洗礼や堅信礼のある礼拝、教会創立等の記念礼拝、そして夏季の屋外礼拝である。ポザウネンコアは、礼拝の前奏および後奏、説教後の間奏、聖餐式の音楽、賛美歌の前奏および伴奏を演奏する。ポザウネンコアがどの礼拝で演奏するか、何を演奏するかは、牧師、教会音楽家あるいはオルガニスト、そしてポザウネンコアのコアライター（Chorleiter）＝指揮者・指導者が、礼拝の主題に沿って協議し、決定する。コアライター

は、豊富な選択肢の中から、礼拝の主題に相応しい楽曲を団員の希望や演奏技術を考慮に入れて選択する。ポザウネンコアが所属している教会だけでなく、ポザウネンコアを持たない近隣の教会での演奏を依頼されることもあるため、平均して月に1～3回は礼拝での演奏がある。教会堂内での礼拝の場合はオルガンの演奏も加わるが、屋外礼拝ではポザウネンコアがすべての演奏を担当する。

また、「金管音楽礼拝（Bläsergottesdienst）」と呼ばれる、ポザウネンコアが主導して行う礼拝が、年に1～2回催される。これは、主日礼拝の形式に則りながら、牧師の説教に代わってポザウネンコアの演奏を中心に構成される音楽的礼拝である。J. クーロー以来、ポザウネンコアによる音楽的礼拝は、コラールやコラール編曲、聖書を主題とした楽曲の演奏による福音宣教が目的とされてきた。

ポザウネンコアは、年に1～2回、教会ゲマインデに向けて教会で演奏会を開く。ポザウネンコアの演奏会は、コラールやコラール編曲、聖書を主題とした楽曲の演奏による「金管音楽礼拝」と同等の宗教的行事として扱われてきたが、最近では通俗曲を中心としたプログラムが組まれる場合もある。ゲッティンゲンのポザウネンコアの演奏会では、ビートルズの楽曲をはじめとした流行曲や「パイレーツ・オブ・カリビアン」などの映画音楽が演奏されていた。しかし、プログラムが通俗的なものでも、演奏会は礼拝と近似した構造となっている。すなわち、演奏会前には礼拝同様鐘が鳴らされ、牧師による短い説教か聖句の朗読、出席者の賛美歌合唱、主の祈り、祝祷が行われる。また、演奏会が娯楽性を帯びたとしても、ポザウネンコアは演奏によって金銭的報酬を得ることは目的としない。

図 1. 待降節のポザウネンコア（2014 年　於ゲッティンゲン市グロース・エラースハウゼン、筆者撮影）

3.〈ゲマインシャフト〉の経験

以上が、ポザウネンコアの活動の外観である。以下では、ポザウネンコアの参与者の視点に接近し、ポザウネンコアにおける音楽的経験の描写を試みる。これは、筆者が2014～15年にフィールドワークを実施したゲッティンゲンの3つのポザウネンコアJ、C、Eの音楽実践の事例である。

3.1. ポザウネンコアの参与者

ポザウネンコアは、第二次世界大戦期に至るまで、農民層・手工業者層の青年男性による宗教音楽実践という性格の活動であった。戦後、女性の参与も一般的となり、70年代以降、構成員の社会的背景は更に多様化した。2010年代現在、ポザウネンコアでは多様な社会的背景を持った青少年から

老壮年までが分け隔てなく活動している。例えば、トランペットを始めたばかりの10歳の少年がポザウネンコアで30年以上演奏を続けてきた年金受給者の女性トランペット奏者や50代の水道技術者の男性トランペット奏者と席を連ねて演奏し、あるいは、神学を学ぶ20代の女性大学生と、森林学の40代の女性教授が隣り合ってトロンボーンを一緒に演奏している、という光景が見られる。

コールの調査によれば、ハノーファー州教会および北ドイツ教会の教区におけるポザウネンコアの団員の平均年齢は、47歳である。割合としては、40～50代が最も多く、それに10代、60～70代が続く。20～30代の割合は少ないが、これは就学、就職、育児等による時間的、身体的および精神的制約が要因とされている（Koll 2013, 11）。ゲッティンゲンは、学生が人口の約2割を占める大学都市であるため、ポザウネンコアにも学生の団員が多く、20代の割合が他の地域と比べて高い。しかし、ゲッティンゲンにおいても、他の地域同様、ポザウネンコアでは10代から80代に至る年齢層の団員が一緒に活動している。また、団員の職業について見ると、近年では高等教育まで修了し、常勤で定収入のある職業を持つ者が多い傾向にあるが、学生、会社事務職、工業関係の技師、主婦、大学教授、年金受給者と様々である（Koll 2013, 12-14）。

多くの団員は、同じくポザウネンコアで活動している家族・親類や知人の影響でポザウネンコアに入団する。例えば、ゲッティンゲンのポザウネンコアのB.S.[5] は、父が故郷ザクセンのポザウネンコアで演奏しており、父の指導で、ポザウネンコアでトランペットを吹き始めた。就職によるゲッティンゲンへの転居以来、ゲッティンゲンのポザウネンコアで活動するようになった。B.S.の娘S.S.もまた同様にポザウネンコアでトランペットを始め、父と一緒に演奏している。I.G.は、近所に住む年上の友人の影響で、ポザウネンコアでトランペットを演奏するようになった。I.G.の母F.G.は、息子の勧めで、ポザウネンコアでトロンボーンを始めた。このようにして、団員の多くはポザウネンコアで金管楽器の演奏を始め、ポザウネンコアで金管楽器の演

奏法を習得する。

ポザウネンコアには入団に関する規約や技術的条件はない。コアライターや団員と連絡をとるか、直接練習を訪問することからポザウネンコアでの活動が始まる。多くのポザウネンコアでは、団員によって「初心者講習（Bläserschule）」が提供されており、初心者でも金管楽器演奏法を学ぶことができる。楽器は、個人所有がほとんどだが、ポザウネンコア所有の楽器やポザウネンヴェルクの貸出楽器を借用することも可能である。ポザウネンヴァルト（Posaunenwart＝ポザウネンヴェルク所属のポザウネンコアの指導者・監督者）の指導やポザウネンヴェルクが提供する講習を受講し、個人練習をして演奏技術の向上に努める者もいるが、ほとんどの団員はポザウネンコアでのみ金管楽器を演奏する。

ポザウネンコアの組織運営と演奏活動は福音主義教会と密接に関係しているが、現在のポザウネンコアにおいてキリスト教信仰は参与の必要条件ではない。かつて、ポザウネンコアでは、練習の前後に祈祷や聖書読み合わせを行う慣習があったが、近年ではこうした宗教儀礼的慣習も一般的でなくなってきている。もっとも、団員のほとんどは居住地の福音ルター派教会に所属しているが、必ずしも信仰のための教会の活動としてポザウネンコアに集まっているわけではない。牧師や信徒代表を勤めて教会と深く関わる者や、神の賛美と福音伝道を目的としてポザウネンコアで演奏する者がいる一方、教会に無関心な者、無宗教者もポザウネンコアで演奏している。ポザウネンコアは、一緒に演奏する意思のあるものは誰でも参与可能とすることを基本姿勢としている。ただし、外部から見れば、ポザウネンコアはやはり福音主義教会の活動であることが前提とされており、現代のドイツ社会において小さくない存在であるトルコ系ないしイスラム系移民の参与者は見られない。

団員の社会的背景や演奏技術、キリスト教や教会に対する態度は種々多様である。しかし、ポザウネンコアには、団員が「金管楽器の家族（Bläserfamilie）」と呼ぶような、親密な紐帯がある。団員は、ポザウネンコアの活動以外でも頻繁に連絡をとりあい、食事を共にし、育児や引越しなど生活の私的な面で

も協力をしあうなど、生活の多くの時間を共有している。ポザウネンコアの音楽実践はこうした親密な紐帯の中で行われ、音楽実践によってこの親密な紐帯はより強められる。

3.2. 毎週の練習

公式演奏活動としては礼拝での演奏や教会での演奏会が重視されているが、団員がポザウネンコアの活動のうち特に重点を置くのは、毎週の練習（Probe）に集まることである。実際、他のどの活動よりも、練習が活動時間の大部分を占めており、礼拝や演奏会の準備をする必要がない場合でも、団員は練習に集まる。以下は、練習の様子の描写である。

ポザウネンコアの練習は、平日の夕方、多くの場合19時前後から1時間半、教区会館（Gemeindehaus）で行われる。演奏会前など特別な場合を除いて、毎週、同じ場所で、定時に始まり、定時に終わる。

夕方、街の人通りが少なくなる頃、およそ練習開始時間の5～10分前になると、ポザウネンコアの団員がそれぞれ楽器を持って教区会館に集まる。決まって団員同士全員が、握手や抱擁を交わしながら、友好的に挨拶をしあう。それぞれ協力しあって椅子や譜面台の準備をし、各自の楽器を準備して、世間話などの雑談をしながら練習の開始を待つ。団員同士の談笑が優先され、個人的なウォームアップはしない。

コアライターが「はじめよう！（Auf geht's!）」と声をかけ、練習が始まる。メンバーはコアライターの方へ注意を向けるが、打ち解けた雰囲気が変わることはない。コアライターも、雑談を交えながら練習にとりかかる。

練習は基礎合奏（Einblasen）から始まる。基礎合奏の内容は、簡単な音階練習などであるが、演奏技術の達成以上に、合奏に集まったメンバーが、日中の生活から離れ、音響に集中し、ポザウネンコアの〈ゲマインシャフト〉に融和することに意識が向けられる。ポザウネンコアEでトロンボーンを演奏するB.G.は、ポザウネンコアに来てから全員で音を出し、音響に集中してゆく様子を、インタビューにおいて以下のように説明した。ポザウネンコア

Eでは、練習の最初に、コアライターの「美しいFの音（Ein schönes F!）」の指示で、全員でヘ音を演奏するのが慣習となっている。

> 皆が心地よく挨拶し合うことから、もう本当に素晴らしいことが始まっている。これは、ポザウネンコアの中に入って、自分のことを受け入れてもらう、ということのために大事なこと。そうしているうちに、練習の音楽的な部分になる。練習はより人間的で思いやりのあるものとして始まる。私はいつも最初、ポザウネンコアの中に入って、他の皆と一緒に演奏して、練習の始めの「美しいFの音」を、またいつものように鳴らすのに少し時間がかかるのだけれど、それがいつしかみんなで一緒の気持ちになって…、一体いつ、どうしてそうなるのかはわからないのだけど、ともかくそうなって、ポザウネンコアのグループの〈ゲマインシャフト〉を経験することになる。（インタビュー、2015年1月29日ゲッティンゲン）

ポザウネンコアでは、初心者や、金管演奏に十分に習熟していない者も少なくなく、全体として見ても一人で十分に自信を持って音を並べることができる奏者は少ない。そのため、結果としてイントネーションやリズムが技術的に正確な演奏をすることは困難である。しかし、練習の過程で演奏不可能な箇所や演奏上のミスがあったとしても、多くの場合許容される。いかなる演奏技術の水準を持つ奏者であっても合奏の中に受け入れることが、ポザウネンコアの合奏における倫理的規範である。ポザウネンコアでは、高度な演奏技術の達成ではなく、いかなる演奏技術水準であれ、ポザウネンコアに参与する奏者全員が、全体の音響の中に一体となることに最大の価値が置かれているのである。

ある日のポザウネンコアEの練習では、団員たちがとても満足した様子であった。ポザウネンコアEでトランペットを始め、ポザウネンコアEの中で成長して来たN.F.は、ポザウネンコアの活動の中で何がすばらしいことだと

感じるか、という練習後のインタビューでの質問に、練習での音楽的経験を振り返りながら以下のように回答した。

> 何が私にとってすばらしいか…　演奏しているときに本当にすばらしいと思うのは、とても良く共鳴しあったとき。全てのコアでうまくいくわけじゃないと思うけど、私たちのコアでは、互いにこうして支え合って演奏している。これはただ単に集まって一緒に演奏するというだけのことじゃなくて、そうじゃなくて、これは〈ゲマインシャフト〉。これは本当にすごいことだと思う。私たちは本当にとても良く共鳴しあっている。（インタビュー、2014年10月9日ゲッティンゲン）

B.G.やN.F.が説明した〈ゲマインシャフト〉の感情は、共同でつくりあげる音響を通じてより集中的に経験される。ポザウネンコアJでトロンボーンを演奏しているG.R.は、ポザウネンコアで演奏しているときにどう感じるか、という自由記述のアンケートの回答で、ポザウネンコアでの音楽的経験を以下のように記述している。

> 私は音響の真ん中にいる
> 多くの仲間と一緒に音楽をすることを享受している
> ポザウネンコアに所属していることを嬉しく思う（アンケート回答）

練習の間、演奏の合間には談笑が絶えない。時に騒がしくすらなるほどである。一見すれば、これは演奏に集中していないようにも見える。しかし、団員は、こうした状況を、より肯定的なものと理解している。ポザウネンコアJとCでトロンボーンを演奏するD.F.は、アンケートにおいて、ポザウネンコアの練習中の雰囲気について、「リラックスしていて、時に落ち着かない。しかし、ポザウネンコアの活動にはメンバー同士のコミュニケーションも含まれており、練習の際のこうした状態は、コミュニケーションをとるメンバー

どうしにとって良いこととして作用している。」と回答している。また、トランペットのS.E.は、「（質の高い演奏を目指すという）能率主義的な圧力がないが、それでも（充実した）音響の経験のある、すばらしい練習。親愛と友情があり、誰に対しても開かれている。」と回答している。

練習の終わりは、ポザウネンコアによって様々だが、夕べの歌（Abendlied）や団員の気に入っている楽曲を演奏する。ポザウネンコアEでは、練習の終わりにEG482「月はのぼりて（Der Mond ist aufgegangen）」や、団員が最も気に入っているEG488「日暮れて闇はせまり（Bleib bei mir, Herr）」やそのコラール編曲を演奏する。このとき、〈ゲマインシャフト〉の感情は最も昂まり、集中的なものとなる。一体となった音響の中で、音響を通して、ポザウネンコアへ共属しているという感情が経験される。

練習が終わると、多くの団員は教区会館に残り、時に日付が変わる時間までビールを片手に、あるいは食事をしながら談笑する。時に教区会館から遠くない酒場に移動することもある。こうした談笑の話題は、ポザウネンコアや音楽に関するものの場合もあるが、身辺の出来事に関することや世間話などの雑談であることがほとんどである。息子の勧めでトロンボーンを始め、ポザウネンコアJとCで活動するF.G.は、筆者がポザウネンコアに入って間もない頃、練習後に次のように説明した。「（こうして）食べて、飲んで、というのがポザウネンコアの文化！」

4. ポザウネンコアにおける紐帯形成

以上の民族誌的描写で強調したかったのは、ポザウネンコアでは、演奏の技術的成果や美的表現よりも、社会的親交と共属感情の経験に至上の価値が置かれており、音楽的行為が親密な社会的相互行為と不可分となっているということである。ポザウネンコアは、こうした音楽＝社会的相互行為を通じて、団員各個の社会的背景や宗教的態度の差を越えた、強固な紐帯を形成する。

類例のヨーロッパのローカルな市民的ブラスバンドの研究において、社会的相互行為と密接に結びついた音楽実践が、ブラスバンドの構成員の団結を親密なものとし、共同体的紐帯が形成される、という事例が指摘されている。フィネガンによるイギリスの市民ブラスバンドの事例（Finnegan 2002）、デュボワらによるアルザス地方のブラスバンドの事例（Dubois et al 2013）、ブルチャーによるポルトガル北部のブラスバンド活動バンダ・フィラルモニカの事例（Brucher 2013）では、共通して、ブラスバンドにおいて、音楽演奏それ自体のみが活動の目的とされているのではなく、「音楽外」の社交などの社会的相互行為が重要な意味を持っている。構成員は、ブラスバンドにおける音楽演奏の技術的・美的成果の達成を通じて、音楽的行為と社会的相互行為の技術を同時に習得してゆき、その過程でブラスバンドが共同体化されてゆく。社会的相互行為と音楽実践が密接に結びついているポザウネンコアにおいても、これらの事例と同様の分析が可能であろう。

しかし、ポザウネンコアにおいて最も特徴的なのは、音楽的行為と社会的相互行為は関連し合う別個のものではなく、音響と身体的運動による集団的な音楽的行為が、紐帯を感情的に経験する社会的親交のための行為となっているということである。ここで、音楽形式の点から見てブラスバンドの音楽分析としては典型ではないが、民族音楽学者のT. トゥリノによる「参与型パフォーマンス」が、ポザウネンコアにおける音楽＝社会的相互行為の分析に有効な概念となりうる。

「参与型パフォーマンス」では、演奏の技術的・美的結果よりも、居合せる参与者の完全な参与が達成され、社会的結束が経験されることに最大の目的と価値が置かれる。

> 完全に参与的な状況では、演奏者－聴衆の区分はなく、参与者と潜在的な参与者のみが居合せる。意識が向かうのは、参与者間の音響と身体的相互行為である。参与型パフォーマンスは、様式化された音響と運動が、最も重要なこととして、昂まった社会的親交として概念化されてい

> る、他とは違った活動領域である。参与型音楽実践において、参与者の主たる意識は、行動の結果としての最終的な行動、つまり、「すること（the doing）、そして他の参与者にある。［中略］（この参与型音楽における）他の参与者への昂まった意識の集中が、参与型の音楽や舞踊が、社会的結束のための極めて強い力となっていることの所以である。参与型音楽において、（理想的には）居合せる全ての参与者が同様の形で積極的に関与することで、参与者個人の自意識が減じられることにもなるのである。（Turino 2008: 28-29）

トゥリノによれば、これに対置されるのは「上演型パフォーマンス（presentational performance）」、つまり、聴衆の要求のために演奏を提供する演奏者と、直接音楽演奏に加わることのない聴衆という役割の区分が明確にされている実践形態である。演奏者－聴衆の区分が明確な「上演型」では、行動それ自体よりも、聴衆に聴取される、演奏者の行動の結果としての演奏の美的成果に価値が置かれる。つまり、音楽がより抽象的に対象化されている（近代西洋芸術音楽の演奏会における上演がその代表例）。それに対し、「参与型」では、演奏における音響と身体的運動の、以下のような経験に最大の価値が置かれる。

> パフォーマンスがうまくいっている場合、音響と運動の一体性に意識の焦点が当てられるため、参与者間の差異は溶解してなくなる。こうした瞬間、集団で一緒に身体的動作をとることと音響をつくりだすことによって、参与者間に、何者も介在しない共在感覚と深く意識される相似性感覚が、したがって、アイデンティティがつくりだされるのである。（ibid: 43）

ポザウネンコアでは、音響と運動への集中的な身体的・感情的参与が、「昂まった社会的親交として概念化されている」（ibid: 28）、つまり、音楽的行

為が社会的親交のための行為として経験されているのである。ポザウネンコアEでコアライターを務めるB.S.は、インタビューで、ポザウネンコアの「素晴らしい音響は〈ゲマインシャフト〉だ。〈ゲマインシャフト〉の産物だ。」と述べ、ポザウネンコアの音響空間に〈ゲマインシャフト〉の感情が汪溢している状況を強調した。ポザウネンコアでは、この社会的相互行為としての音響と運動への集中的な身体的･感情的参与の過程、つまり、〈ゲマインシャフト〉の経験の過程で、親密な紐帯が形成されている。

このポザウネンコアの〈ゲマインシャフト〉の経験はしかし、ポザウネンコアの実践形態に自然に内在するものではない。ポザウネンコアの活動は実際、常に「上演型」の目的と価値への要求と葛藤に直面している。団員の中には、高度な演奏技術や美的表現の達成を望む者もおり、奏者の技術水準からすると高度な演奏技術を求められる楽曲を演奏する場合もある。そうした場合、各奏者の演奏技術が統一的でないポザウネンコアでは、演奏が技術的には失敗し、不満を生む場合も少なくない。しかし、団員は、技術的成功よりも、参与が達成される方法を選択的に優先している。つまり、各奏者がどのような演奏技能を持っているにせよ、全員が合奏に加わることができるよう配慮し、一体となった音響体をつくりだすことに集中する。即物的な演奏技術ではなく、ポザウネンコアの音響体に加わり、〈ゲマインシャフト〉を経験できるようになることが、「ポザウネンコアの金管奏者」になることなのである。

結

〈ゲマインシャフト〉は、ポザウネンコアの活動においてますます強調されるようになってきている。2016年6月、ドレスデンにおいて第2回ドイツ福音主義ポザウネンターク（Deutscher Evangelischer Posaunentag）が開催された。全ドイツのポザウネンコアの地域連盟の上部組織であるドイツ福音主義ポザウネ連盟（Evangelischer Posaunendienst in Deutschland）の主催で、全

ドイツからポザウネンコアの金管奏者約18,000人が集まり、ドレスデンの旧市街を埋め尽くした。現代ドイツの大衆文化の象徴であるサッカースタジアムで行われた閉祭礼拝では、参加した金管奏者全員が合同で演奏した。礼拝の最後にはJ.S.バッハ作曲の「栄光、神にありと歌わん（Gloria sei dir gesungen）」が〈ゲマインシャフト〉の熱狂とともに演奏され、演奏後には霰のごとく歓喜の喝采が沸き起こった。参与型パフォーマンスとしてのポザウネンコアはこのような大規模な合同演奏を可能とし、多くの参与者を音楽－宗教的イベントへと巻き込む。

本論文では、ポザウネンコアの音楽実践を民族誌的に描写し、トゥリノの「参与型パフォーマンス」の概念を援用することで、ポザウネンコアの音楽実践の目的と価値が、社会的相互行為としての音響と運動への集中的な身体的・感情的参与を通じて経験される〈ゲマインシャフト〉にあり、その音楽＝社会的行為への参与の過程で、ポザウネンコアに親密な紐帯が形成されているということを考察した。本論文はしかし、事例研究に基づくポザウネンコアの音楽学的研究の第一段階である。ポザウネンタークのような大イベントの成功などによってますます強調されるようになってきている〈ゲマインシャフト〉は、より広い社会－文化的条件においてどう理解され得るのだろうか。まず、ポザウネンコアという家族的集団への共属感情であることは、本論文において民族誌的に記述してきた通りである。しかし、このプロテスタンティズムと密接に関係した金管合奏は、現代ヨーロッパ情勢におけるドイツの社会的・文化的状況においてどのような意味が付与されているのか。

ポザウネンコアでの金管合奏は、強烈な〈ゲマインシャフト〉、共属感情の経験である。この金管合奏における音響と身体運動による身体－感情的コミュニケーションにより接近した分析・考察も含め、本稿の成果に基づく調査を継続したい。

［注］

1） 本論文は 2015 年度大阪大学大学院文学研究科に提出の修士論文「ポザウネンコアの民族誌　共属感情の経験としての音」に基づく。
2） Deutsche UNESCO-Kommission „Posaunenchöre“ https://www.unesco.de/kultur/immaterielles-kulturerbe/bundesweites-verzeichnis/eintrag/posaunenchoere.html（2017 年 8 月 1 日閲覧）
3） 「ゲマインシャフト（Gemeinschaft）」は、一般的に「共同体」・「団結」・「連帯」を意味するが、本論文では、一般的、理論的な意味と、ポザウネンコアの参与者が発話した、ポザウネンコアの音楽的行為と結び付けられた「ゲマインシャフト」を区別し、後者を特に〈ゲマインシャフト〉と表記する。
4） 聖マルティン祭はカトリックの聖人祭であるが、プロテスタント地域においても、マルティン・ルターの誕生日と関係づけられ、子どもの提灯行列が行われる。このような民俗的慣習に関する演奏は、地域によって異なる。
5） 本論文中での構成員のイニシャルは全て仮名。

［参考文献］

Bosch, Ben van den, „Die Entstehung und Entwicklung der Posaunenarbeit der Brüdergemeinen in Deutschland und aller Welt“, in Horst Dietrich Schlemm (Hg.) *Beiträge zur Geschichte evangelischer Posaunenchorarbeit. Bd.1* (Gühtersloh, 1989), 43-65.

Brucher, Katherine und Suzel Ana Reily. “Introduction: The World of Brass Bands”, in Suzel A. Reily and Katharina (ed.), *Brass Bands of the World. Militarism, Colonial Legacies, and Local Music Making* (Surray: Ashgate, 2013), 1-32.

Brucher, Katherine. “Composing Identity and Transporting Values in Portuguese Amateur Wind Bands.” in Suzel A. Reily and Katharina (ed.), *Brass Bands of the World. Militarism, Colonial Legacies, and Local Music Making* (Surray: Ashgate, 2013), 155-176.

Dubois, Vincent, Jean-Matthieu Méon and Emmanuel Pierre, *The Sociology of Wind Bands: Amateur Music Between Cultural Domination and Autonomy*, trans. by Jean-Yves Bart (Surrey: Ashgate, 2013).

Eismann, Irmgard. Kleine Literaturkunde“, in Irmgrad Eismann und Hans-Ulrich Nonnenmann (Hg.), *Praxis Posaunenchor. Handbuch für Bläserchorleitung* (Stuttgart: buch+musik, 2013), 314-316.

Finnegan, Ruth. *The Hidden Musicians: Music-Making in an English Town* (Connecticut: Wesleyan University Press, 2007).

Flaes, Rob Boanzajer. Brass Unbound Secret Children of the Colonial Brass Band (Amsterdam: Royal Tropical Institute, 2000).

Herbert, Trevor (ed.), *The British Brass Band: A Musical and Social History* (Oxford: Oxford University Press, 2000).

細川周平「世界のブラスバンド、ブラスバンドの世界」阿部勘一他『ブラスバンドの社会史―軍楽隊から歌伴へ』(青弓社，2001 年)，55-82.

Koll, Julia (Hg), *Gemeinsam. Musik. Machen. Ergebnisse der Posaunenchorbefragung 2012* (Uelzen, 2013).

Koll, Julia, *Kirchenmusik als sozioreligiöse Praxis. Studien zu Religion, Musik und Gruppe am Beispiel des Posaunenchors* (Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2016).

Lange, Hans-Jürgen. *„Sein Lob tön' im Posaunenschalle". Die Geschichte der Posaunechorarbeit in der Hannoverschen Landeskirche* (Münster: LIT 1999).

Reily, Suzel A. und Katharina Brucher (ed.), *Brass Bands of the World: Militarism, Colonial Legacies, and Local Music Making* (Surrey: Ashgate, 2013).

Schlemm, Horst Dietrich (Hg.), *Beiträge zur Geschichte evangelischer Posaunenchorarbeit, Bd.1-6.* (Gütersloh: Gerd Mohn, 1989-2001).

Schlemm, Horst Dietrich, „Zusammenfassung mit Hinweisen zur Aufführungspraxis", in Horst Dietrich Schlemm (Hg.), *Beiträge zur Geschichte evangelischer Posaunenchorarbeit, Bd.4* (Gühtersloh: Gerd Mohn, 1996), 316-338.

Schnabel, Wolfgang. *Die evangelische Posaunenchorarbeit. Herkunft und Auftrag* (Göttingen: Vandenhoeck&Ruprecht, 1993).

Schnabel, Wolfgang. *Drei große Förderer der evanglischen Posaunenbewegung. Johannes Kuhlo, Adolf Müller, Wilhelm Ehmann* (Bochum: Brockmeyer, 1994).

Schnabel, Wolfgang. *Geschichte der evangelischen Posaunenchorbewegung Westfalens 1840-2000* (Bielefeld: Luther, 2003).

Turino, Turino, *Music as Social Life: The Politics of Participation* (Chicago: Chicago University Press, 2008).

（大学院博士後期課程学生／日本学術振興会特別研究員（DC））

SUMMARY

The Sense of Being Together in *Posaunenchor*s: An Ethnographical Study on the Participatory Brass Performance

Ryoto Akiyama

Posaunenchors are the congregational brass bands associated with the Protestant Church in Germany. They originated with the Christian revival movement in northwest Germany in the nineteenth century, and are regarded as musical means of praising God and of edifying congregations in ecclesial and theological contexts. There are currently about 7,000 Posaunenchors, and about 120,000 brass players from diverse age groups and various social and musical backgrounds. Based on intensive fieldwork conducted in 2014 and 2015, mainly in Göttingen, this paper considers the musical practice and experience of these groups. The brass players of Posaunenchors experience a particular sense of "being together" (*Gemeinschaftsgefühl*) as members of a collective brass ensemble, and this experience is emphasised by the goal and the value of their music making rather than technical and aesthetic achievement. Applying the concept of participatory performance, this paper is an analysis of the musical participation experienced by the members of such groups, and an attempt to demonstrate that Posaunenchors' music-making with sound and motion is conceptualized as a heightened social intercourse. The first part of the paper is an outline of the historical background, instrumentation, and general repertoire of Posaunenchors; the second part is an overview of their musical practice, which is structured according to the Church year and the service. Through a description of the musicians' participation in the weekly rehearsals, the remaining sections discuss the experience of solidarity achieved through the music making and the negotiation to maintain participatory practice.